

ことばとココロと社会(その2)

一 岡崎市における身内敬語意識の量的推移一

横山 詔一(国立国語研究所 言語変化研究領域)

国立国語研究所は言語生活に関する大規模な経年調査を日本各地で実施



言語生活(言語行動・言語意識など)の科学的研究

- 国立国語研究所の創立は1948年12月20日
- その翌年1949年に八丈島で共通語化調査を実施。その時から統計数理研究所との密接な連携がスタートし、現在も継続(70年間以上)
- 山形県鶴岡市での共通語化調査は1950年スタート
- **愛知県岡崎市での敬語調査は1953年スタート**
- 一連の調査・研究で開拓された調査法と解析手法は、言語研究を含む人文科学のほか、生物学や医学などさまざまな研究分野に貢献

1953年の岡崎調査の風景

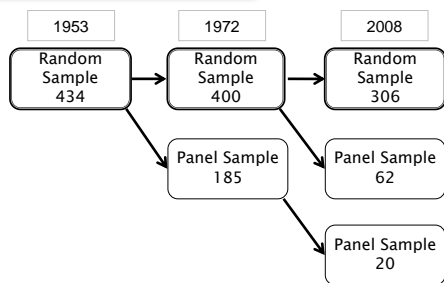


この発表は以下の研究の要点をまとめたものです

- 横山 詔一・朝日 祥之(2018)「身内敬語意識の55年間の変化に関する数量モデル: 岡崎調査データにもとづく検討」『計量国語学』31(7) 497-506

愛知県岡崎市における身内敬語意識の量的推移(1953年, 1972年, 2008年: 55年間にわたる実時間研究)

調査デザインがユニーク



岡崎調査のデザインは

[1953年: 第1回調査] 配給台帳を用いてサンプルをランダム抽出(434名)。

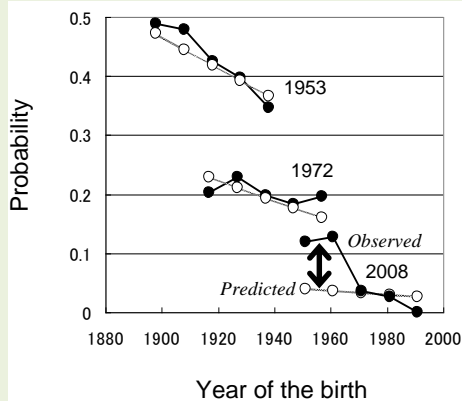
[1972年: 第2回調査] 住民基本台帳等を用いて新たなサンプルをランダム抽出(400名)。また、第1回のインフォーマントを追跡調査(185名)。計585名のデータを収集。

[2008年: 第3回調査] 住民基本台帳を用いて新たなサンプルをランダム抽出(306名)。また、第1回と第2回の両方に参加したインフォーマントを追跡調査(20名)。さらに、第2回のインフォーマントも追跡調査(62名)。計388名のデータを収集。

- 海外でこの調査に類似した方法によるものは、**米国における「シアトル調査」**のみのものである(Schaie, 1996; Schaie and Hofer, 2001)。
- シアトル調査は知能の生涯変化を探る大規模な縦断研究で、老年心理学の分野で世界的に有名。

今回は「身内に対する敬語意識」の質問(項目207)に注目

- 「家の中でも、年上の人や目上の人には敬語を使わなければならないでしょうか。それとも家の中では使わなくてもいいでしょうか」
- 選択肢は「使うべきだ/時や場所や相手による/使わなくてもいい/不明」
- 第1回調査(1953)、第2回調査(1972)、第3回調査(2008)のいずれにおいても同じ質問をした



☆結果は左の図

(縦軸は「身内敬語を使うべきだ」の選択確率, 横軸は話者の生まれた西暦年)

- 以下、図の縦軸は確率論にしたがって確率で表示するが、一般になじみがある百分率(%)で表示することもある。百分率は確率を100倍したものになっている。
- モデル式(ロジスティック回帰式)から得た予測値を○印で、実測値は●印で示した。以下、予測値と実測値のずれを「誤差」と呼ぶ。
- 2008年に実施した第3回調査の誤差は、10歳代(1991年前後生まれ)で3%、20歳代(1981年前後生まれ)で0%、30歳代(1971年前後生まれ)で0%、40歳代(1961年前後生まれ)で9%、50歳以上(1951年前後生まれ)で8%であった。

☆結論と今後の課題

- モデル式(ロジスティック回帰式)による予測は、3回の調査全体で実測値とよく適合し、解析結果は良好。
- ただし、2008年調査の40歳代と50歳以上における誤差が大きくなった理由については、今のところ十分な説明ができない。この点は今後の研究に期待したい。